タッチケア協会の活動は さまざまな場所に広がっています

ふれた人、ふれられた人、両者に生まれるあたたかい気持ち、深まる絆
親子で、家族で、施設で、保育園で、「ふれ愛」を育んでいきましょう

NICU
（新生児集中治療室）

入院中の赤ちゃんにタッチケアを行うことで、赤ちゃんの情緒安定、体重の増加、入院期間の短縮、お母さん、お父さんの不安の解消、良好な親子関係などの効果が実証されています。実は、タッチケアの始まりは NICU なのです。

家族

小さなお子さんだけでなく、学童期、思春期、また、ご夫婦で、高齢の親御さんへのタッチケアなど、年齢、世代に関係なく家族のコミュニケーションのひとつとして行われています。“Touch is the language of love” と言われるごとく、タッチはまさに愛の言葉なのです。

乳幼児
（2カ月～）

NICU 退院後を含むすべてのお子さんに、本や DVD を見ながら、自宅で行うことができます。また、産院、子育て支援施設など、いろいろな場所で教室が行われています。親子の愛着形成はもちろん、お友だちづくりの場としても、活用されています。

保育園・幼稚園

親と離れることの不安、自分の気持ちが上手く表現できないいらつきなど、お昼寝の前やちょっとしたコミュニケーションにタッチケアが導入されています。また、保護者向けに教室を開催しているところもあります。

心身障がい児（者）施設

療育センター、児童養護施設などでは、職員が子どもに Hug & Touch を行い、愛着形成・信頼関係の再構築につなげています。災害後のトラウマに対しても、リラクゼーション療法のひとつとして応用されています。

高齢者施設

職員による日常のケアやボランティアによるタッチケアが行われています。ふれた人、ふれられる人の両者に笑顔が増え、情緒が安定することが実証されています。

日本タッチケア協会は、厚生労働省が支援する国民運動「健やか親子 21（第2次）」の推進協議会参加団体です。

「タッチケア」発足ルーツ

わが国でのタッチケアのルーツは、1988年、聖マリア病院 NICU（新生児集中治療室）での保母（現保育士）による保育器の中の赤ちゃんに手を添えることを、「タッチケア」と呼称されていました。その後、米国マイアミ大学「タッチリサーチ研究所」（TRI：Touch Research Institute、フロリダ）のティファニー・フィールド博士によって、「Touch therapy」が学究的に確立され、1997 年、第 9 回世界小児科会議において、いわゆる未熟児（現低出生児）への接触療法として、その研究成果が報告されました。

その研究報告を受け、翌 1998 年、前川喜平先生を会長に、日本タッチケア研究会（現日本タッチケア協会）が発足し、 日本では、「therapy」という名称は、そぐわないということで、ティファニー・フィールド博士と国際 TV 電話で会談し、当時、聖マリア病院 NICU ですでに使われていた「タッチケア」の名称として活動していきたい旨をお願いすると、快く快諾をいただきました。

この経緯を経て、接触療法の代名詞として、日本で最初に『タッチケア』がスタートしました。

当協会が命名した「タッチケア」という名称は、商標登録はせず、誰でもできるものとし、現在は多くのタッチケアが広がっています。NICU から始まったタッチケアですが、赤ちゃんだけでなく、年齢を問わずに実施でき、その広まりは、乳幼児から障がい児、保育園、幼稚園、家族、高齢者へと広がっています。